柳澤健
現代の詩人

八　濱口五兵衛の話　その一

この事件の起つた頃、五兵衛はかなりの老人であつた。その家は村での物持であつた上、長い間、村の庄屋を勤めたので、五兵衛は村の人々から尊敬されてゐた。村の人たちはいつも五兵衛を「濱口のおぢいさん」と呼んだが、村第一の金持なので「濱口の大盡」ともいつてゐた。五兵衛はいつも小作人や貧乏漁師の爲になることばかりしてゐた。喧嘩の仲裁から、困つた時の金の立替、時には貧乏人に只同樣にお

米を賣つてやつたりした。

五兵衛の大きな草葺の家は、一つの灣を見おろした小さい高臺の上に建ててあつた。この高臺は、小さい段々の水田が濱の方へと並んで居て、三方は山に取卷かれてゐた。この土地は、海に向つて、その山の腹から濱邊までえぐり取つたやうになつてゐて、五兵衛の家は、その中程の高臺にあつた。海の方から見ると、細い白いうね〳〵道が、段々の田を左右にわけて、下の村から五兵衛の家へと登つてゐた。そして下の村には、灣に沿うて九十ばかりの草葺と、一つの神社とが並んで居た。

それは秋のある夕方の事であつた。五兵衛は下の村の祭

の用意を、自分の家の縁側から眺めて居た。その年は非常に稻の出來が好かつたので、氏神で盛んな豐年祭が行はれる事になつた。老人は村の屋根の上にひるがへつて居る大幟や、竹の竿についた祭提灯や、神社の森影に見える飾り行燈や、派手な揃ひを着た若い人たちの群を見ることが出來た。その時、老人と一緒に居たのは、小さい十歳の孫だけであつた。他の者は早くから村の方へ下りて行つたが、少し加減の惡かつた五兵衞老人は、孫と淋しく留守居をして居たのであつた。

その日は、秋だといふのに、何となしに蒸暑かつた。そして夕方になるとそよ風が出たが、それでも何だか重くるしい

暑さが殘つてゐた。そんな日には、とかく地震があるものだつたが、この日も間もなく地震が來た。その地震は別に驚くほどのものではなかつた。しかし、これまで幾百回となく地震を經驗してゐる五兵衞老人には變に思はれた。長い、のろい、ゆつたりとした搖れやうであつた。多分極めて遠い土地の大地震の餘波であるらしかつた。家はきしみながら幾度か穩かに搖れて、また元の靜けさに返つた。地震が終ると、老人の鋭い考深い眼は、氣遣はしさうに下の村を見た。丁度、何ともわからない所で、何となしに少し變だといふ感じに、思はずある一方に氣が取られるやうに、老人には、何となく沖合の方に、常ならぬ事があるやうに思は

れたのであつた。立上つて海を眺めた。海は不意に暗くなつて、何だか、風と反對に波が動いて居るやうだつた。波は沖へ沖へと走つて居た。

忽ちの中に、下の村でも、この妙な出來事に氣が付いた。先の地震を感じた人は一人もなかつたが、この海のうごきには皆が確に驚いた。老人の眼にも、村の大勢が、浪際へ浪際へと走るのが見えた。誰もがかつて知らぬほど、海水が引きはじめた。これまで知られなかつた、肋骨のやうな畦（うね）のある砂の廣場や、海草のからんで居る大きい岩底が見て居るまに現れて來た。が、村の人々は、この意外な引潮が、何を意味するかは知らないやうだつた。

五兵衛自身も、こんな有樣を見たのは初めてだつた。しかし幼い時に、父が話したことが胸に浮んで來た。何百年の前にあつたといふ傳說でも、彼は知つてゐるのであつた。彼には海がどうなるかが解つた。多分この時、五兵衛老人の咄嗟に考へたことは、下の村へ孫をやるにかゝる時間の事であつたらう、山のお寺の僧に、大釣鐘を鳴らして貰ふまでに要る時間の事であつたらう。しかしそれは、彼が大切とする時間よりは長くかゝるのだつた。老人は孫に向つて大聲で命じた。

「おい忠、早く、大急ぎだ。松火をつけて來い。」

松火は嵐の晩に使ふために、海岸の村々ではどの家にもあ

つた。子供はすぐに持つて來た。すると老人はそれを掴んで、家から少し下つた田に急いだ。そこには、濱口一家の一年の勞役の酬として、熟しきつた稻の刈束が堆く積んであつた。老人はその近いものに火をかけた。日に乾いた藁は、吹きあげる海風にどつと燃えあがつた。老人は走つて、第二の稻の山に火をつけた。第三の山につけた。一山、一山、忽ちに天に沖する大きな煙の渦が、幾條も幾條も合して空に高く渦卷いた。孫の忠は靑くなつて、

「お祖父さん、お祖父さん。どうして。どうしたの。」

と叫んだが、五兵衞老人は答へようともしなかつた。彼はたゞ命の瀨戸にある下の村の四百人の事ばかり考へて居たのだつた。忠は突然泣きだして家の中へ駈けこんだ。その祖父が氣が狂つたのだと思つたのである。

九　濱口五兵衞の話　その二

老人は自分の家の最後の稻むらに火をつけると、その松火を投出した。この焔に山寺から鐘が鳴り初めた。村の人人は、この鐘の響に、この煙の渦卷に、濱邊から村を過ぎて、丘へ丘へと、蟻のむれのやうに登つて來た。

日は沈みかゝつて居た。灣の皺のある海底や、斑に土色のある大きい砂原の廣がりを、最後の夕映がぼんやりと照した。波はまだ沖へ沖へと走つて居た。

實際は、老人の思つたほど長くたゝない中に、火消しのための一隊が高臺に着いた。その二十人ばかりの村人は、すぐ稻むらの火を消しにかゝらうとした。が、老人は手を擧げて止めた。

「うつちやつて置け。燃やして置け。大變だ。村中皆ここへ來るのだ。」

村中の人々が追々と集つた。若い男たちや子供が來た。元氣な女たちや娘などが來た。それから老人の大方も來た。しまひには上からの合圖に、子供を負つた母親たちが來た。が、次第に集つた人々は、やはり何事か知らずに、たゞ燃えて居る稻と老人の顏とを不思議さうに眺めて居た。

日は沈んだ。

「お祖父さんが氣が違つたんだ。お祖父さんが火をつけたんだ。」

孫の忠はすゝり泣きながら言つた。

「火をつけたのはおれだ。だが、村ぢや皆來たか。」

老人が嚴然と言つた。村の組合のおもだちや、家の主人たちは、人々の顏を見廻はしたり、坂を上つて來るものを數へたりして言つた。

「はい。皆居ます。でなくつても直ぐに參ります。一體どうしたのですか。」

「來た。見ろ。」

老人は沖の方を指さして、力一杯の聲で叫んだ。

「來た。どうだ。おれは氣ちがひか。見ろ」。

黄昏のうす明りをすかして、一同は東の方を見た。そして薄暗い地平線の端に、まるで海岸のやうな、細い長い一線を見た。それは見て居る中に太くなつた。線は廣くなつた。忽ちその長い暗がりは、堤のやうに、そして絶壁のやうに聳えて、鳥の飛ぶよりも早く進んで來る。押しかへしの浪だつたのである。

「津浪！」

と人々は叫んだ。海がおそろしく盛上つて、山々をとゞろかす程の重さで、電を劈いたやうな泡沫と共に海岸にぶつ

つかつた時、何ともいへぬ、重い、強い、すべての叫び聲を打亡すところの響がした。一時は、雲のやうに坂の上へ突進して來る水煙のあらしの外には、何も見えなかつた。人々はうろたへながらたゞおびえた。そして再び見直した時、人人は、その家々の上を荒れ狂つて走る白い恐ろしい海を見た。その海は、うなりながら、土地の五臓六腑を引きちぎつて退いた。二度。三度。五度。海は進んでは退き、又進んだ。しかしその度毎に波は小さくなつて、だん〳〵元の海へと歸つて行く、大風のあとのやうに荒れながら。

高臺の上には、暫く何の聲もなかつた。一同は下の村の荒廢を無言の中に見つめて居た。投出された岩や、裂けて骨

の出た絶壁の物すごさ、家や社のさらはれた跡には、海底からもぎ取られた海藻や砂利がはふり出されてあるむごたらしさ。村は無い。田畑の大部分も無い。濱には家が一つも無い。見えるのは、たゞ沖の方に物狂はしく浮き沈みする藁屋根の二つ三つだけである。死を遁れた恐しさと、家と財とを奪はれた悲しさに、人々はたゞ茫然とするばかりであつた。老人が再び言つた。

「稻に火をつけたわけはあれだ。」

人々は自分の命の救はれた事に氣がついた。思はず地面に土下座して、五兵衞の前で涙にむせんだ。

老人も少し泣いた、嬉しさから、そして無理をした身體の苦しさから。でもそのまゝでは居なかつた。

「さあ、おれの家は村の家だ。お寺もある。皆しつかりしろ。」

彼は先にたつて案内した。人々はたゞ叫んだり、鬨の聲を擧げたりした。

それから村の困難は隨分續いた。しかし村は追々に恢復した。それには老人の努力も大きかつた。

村が再び建て直された時、人々は五兵衞に對する自分等の負債を忘れなかつたが、その偉大な慈悲の魂に對しては、何とも酬いる事が出來なかつた。彼等は、五兵衞の魂は全く神の如きものであると思つた。そこで其の御魂のために、

一つの社を建てて、鳥居の上には金字で「五兵衛大明神」の額をかけた。村中は少しも其の尊さを疑ふことなく、この神の前に祈と供物とを捧げた。

それについて老人はどう感じたか。それは私は知らない。只私の知つて居るのは、下の村で彼が神として祀られて居る時、彼は山の上の古い草葺屋根の中で、子供や孫たちと、一緒に、前の通り人間らしく質素に住んで居たことである。

もう彼が死んでから百年以上になるが、神社はやはり存在してゐて、村人の祈は、この善良な老人の御魂に向つて、今も捧げられてゐるといふことである。

（小泉八雲―「生神」による）

小泉八雲　日本に歸化したイギリス人。もとの名はラフカディオ・ハーン。明治三十七年歿、五十五歳

厩戸皇子　用明天皇の長子。推古天皇の二十九年（一六一）歿。四十九歳

用明天皇　第三十一代の天皇

推古天皇　第三十三代の天皇